

如庵「本歌」と「写し」の採光に関する継承と差異

高木 寛啓*, 早川 紀朱**

Inheritance and Difference of Daylight Environments in the *Jo-an*: The “Original” and Its “Copy”

Hiroaki TAKAGI* and Noriaki HAYAKAWA**

(Received February 17, 2026)

This article aims to clarify the inheritance and differences in the introduction of daylight between the Jo-an tea house, traditionally attributed to Oda Uraku, and three of its reproduced versions. Based on a daylight simulation engine, the distribution of illuminance within each tea house was analyzed to examine the inheritance and differences in concepts of the use of daylight. The results show that both Jo-an and Ryokakutei, one of its copies, share a lighting composition in which natural light enters primarily through *renji-mado* (‘latticed windows’), thereby illuminating the guest area from behind and the *tokonoma* (‘alcove’) and host’s position from the front. By contrast, the other copies—Ryosokuin and Seijuin—display unique daylight environments created by differences in the location and shape of openings, which produce effects that illuminate the host from the side. Those findings indicate that though the copied tea houses inherit the original’s composition, they introduce variations in the design of elevation and in the treatment of natural light.

Keywords: Jo-an, Daylighting, Tea house architecture, Oda Uraku, Simulation analysis

1. 研究の背景と目的

日本建築の中でも極小空間の茶室の中には茶人たちの好み
が随所に凝縮され、美しい空間を構成しているものが多く存在
する。その代表例の1つである国宝茶室如庵(以下、如庵)は、
織田有楽(1574-1621)によって設計されたと伝えられており、動
線に沿って立てられた斜行する壁や、その足元に敷かれた三
角形の鱗板など、特異で美しい意匠構成から多くの写し茶室が
建造されてきた。また如庵の立面三方向に設けられた窓からは、
日中多くの自然光が入り込み、茶室内の独特の陰影を生み出し

ている。特に有楽窓と称される窓は、詰め打ちした竹連子からこ
ぼれる光により、明障子が虹色に見える効果を生むなど、採光
面でも興味深い特徴がある。本研究では、このような特徴を備え
た如庵の本歌と写し茶室について、採光の観点から分析を行い、
その継承と差異の実態を明らかにする。

2. 既往研究の整理と本論の位置づけ

如庵の本歌と写し茶室を対象として、採光の観点から分析、比

較を行った研究は管見の限り見当たらない。後藤千夏(2011)¹⁾は待庵の写し茶室の現地調査をもとに、待庵の写し茶室の光環境の特徴、および光環境が異なるものの要因を明らかにしている。また、後藤は(2010)²⁾同じく待庵の写し茶室の現地調査結果を通して、千利休の茶精神との関係分析も行っている。本研究における照度分布の検証方法については、後藤の手法を基本的に踏襲しているが、後藤の研究が現地における実測研究となっているのに対し、本研究は計算機上の環境シミュレーション研究となっている。

3. 対象茶室

分析対象とした茶室「如庵」およびその写しである3か所の茶室について説明する。図1は各茶室の展開図であり、平面図中の▽印は躡口の位置を表す。また、図中の如庵には点前座と客座の位置関係が分かるように説明を加えている。^{注1)}

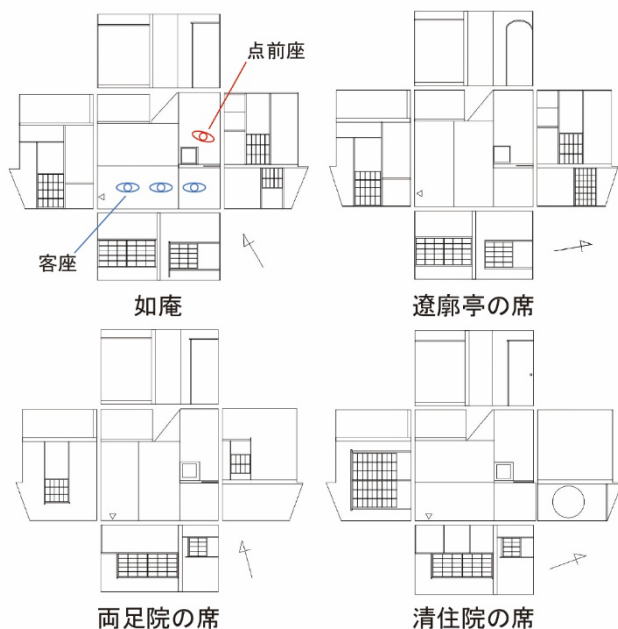


図1 各茶室の展開図（注2の文献を元に筆者が作成）

3.1 如庵

如庵は元和4年(1618)頃、千利休の弟子であり、織田信長の弟である織田有楽が京都東山建仁寺の正伝院境内に創建した。その後の移築は複数回にわたり、明治5年(1872)^{注3)}に永源院、明治41年(1908)に東京都の三井本邸、昭和13年(1938)に神奈川大磯の三井別邸、昭和46年(1971)^{注4)}に愛知県犬山の有楽苑へ移され、現在も同地に保存されている。

如庵は二畳半台目向切下座床の席で、床脇には三角形の地板を備え、向切炉の先に立つ中柱と壁との継ぎ目に檜板が楕型にくりぬかれている。立面構成に目を向けると、東面には有楽窓と称される盲連子窓、南面には下地窓および連子窓、西面には躡口とその上の連子窓が配され、南面には床の間および茶道口が設けられている。天井は竿縁天井の一部かけ込み化粧屋根裏で、突上窓が穿たれている。茶室西側の躡口に接して庇付

きの土間が置かれ、鞘の間へと連続する。また、茶道口奥には三畳の水屋が続き、さらにその奥部に正伝院書院が配置されている。なお、建仁寺正伝院境内に所在した時期の如庵は躡口が南面するように配置されており^{注5)}、照度解析において、犬山有楽苑如庵と創建当初の2通りの条件で解析を行った。

3.2 遼廓亭我前庵

遼廓亭我前庵(以下、遼廓亭の席)の創建年代については明確ではないが、尾形光琳(1658-1716)により、京都の仁和寺門前の堅町に建造されたと伝えられる。天保年間^{注6)}には仁和寺内へと移築され、現在も同地に保存されている。

遼廓亭の席は三畳半台目向切下座床の席で平面・立面・天井構成いずれにおいても如庵の構成をよく踏襲している。北面の開口が盲連子窓ではなく連子窓である点、半畳部北面に設けられた窓の大きさと位置、さらに茶道口鴨居の形状などが、主な相違点として挙げられる。また躡口外の庇付き土間も如庵同様設けられており、茶道口奥には四畳半二室続きの来書院および水間の間が続いている。なお、仁和寺門前の堅町時代に所在した時期の遼廓亭の席は躡口が西面するように配置されており^{注7)}、照度解析において、仁和寺境内遼廓亭の席と堅町時代の2通りの条件で解析を行った。

3.3 建仁寺両足院暦の席^{注8)}

京都の建仁寺両足院暦の席(以下、両足院の席)は明治43年(1910)に建造された茶室である。

両足院の席は三畳半向切下座床の席で、三角板、楕型にくりぬかれた板壁、かけ込み天井および突上窓と如庵の平面構成をよく踏襲している。立面構成に関しては詳細は図1を参照されたい。如庵との主な相違点として、東面の連子窓、西面の下地窓、躡口が南面に配置されていることが挙げられる。茶道口奥は三畳の水屋から土間付き玄関へと連続する。如庵にあった庇付き土間空間は本茶室では設けられていない。

3.4 建仁寺清住院如庵写しの席^{注9)}

京都の建仁寺清住院如庵写しの席(以下、清住院の席)は明治初年(1868)に建造された茶室である。

清住院の席は三畳半向切下座床の席で、両足院の席と同様、如庵の平面構成をよく踏襲している。立面構成に関しては詳細は図1を参照されたい。如庵との主な相違点として、北面が室に隣接しており採光が確保されていないこと、東面が両足院の席と近似する下地窓・連子窓・躡口によって構成されていること、南面が貴人口として大きな戸が設けられていることが挙げられる。そして、天井の突上窓が本席には設けられていない。南面には如庵にみられる庇付き土間が存在せず、茶道口の奥は廊下を介して八畳の客室へと連続している。

4. 解析方法

採光の観点から分析するため、RhinoCeros および Grasshopper に実装された Ladybug/Honeybee ver.1.3 を用いて解析モデルを構築した。解析には環境シミュレーションソフトである Radiance、EnergyPlus、OpenStudio、Daysim を連携させ、照度解析を実施した。

解析日時は、夏至および冬至の 8 時・15 時・17 時^{注10)}の三時刻を設定した。また、突上窓を備える如庵、遼廓亭の席、両足院の席については、突上窓の開放時および閉鎖時の二つの条件を設定し、それぞれ照度分布の比較を行った。解析に用いた各茶室の RhinoCeros 上でのモデリングは、図 2 に示すとおりである。

さらに、茶室構成そのものの比較を明確にするため、方位を統一した条件での解析も実施した。この解析では、全ての席の方位を如庵[正伝院]に揃え、有楽窓のある面が北となる。突上窓を閉鎖し、夏至および冬至の 8 時・15 時の二時刻で設定した。

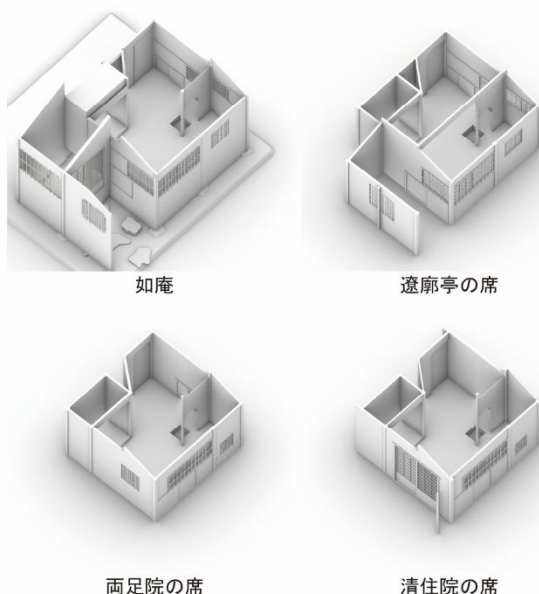


図 2 解析に用いたモデリング（注2の文献を元に筆者が作成）

5. 結果

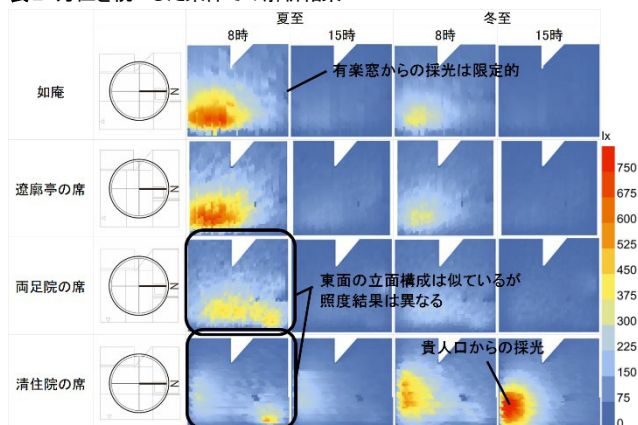
照度解析の結果は、表 1 に示すとおりである。表の各茶室名の下に記した「open」「close」の表記は、それぞれ突上窓の開放時および閉鎖時の解析条件を示している。また、方位を統一した条件で実施した解析結果については、表 2 に示す通りである。

6. 考察

6.1 突上窓開閉と南中高度の違いによる差異(表1より)

まず、夏至 8 時における如庵[有楽苑]、如庵[正伝院]、遼廓亭の席[現況]では突上窓を解放した条件下で室内全体の照度が顕著に高くなった(表1書き込み①)。これは、夏至における南中高度の高さにより、直射日光が突上窓から入射したためだと考えられる。加えて、夏至の遼廓亭の席 [豎町時代]の 8 時および 15 時、夏至の両足院の席の 15 時および 17 時、さらに冬至の両

表 2 方位を統一した条件での解析結果



足院の席の 15 時においても、突上窓の開閉による照度の差が大きく、突上窓からの入射が室内に強い影響を与えていたことが、閉鎖時との比較から確認できる(表1書き込み②)。冬至において突上窓開閉による照度差が夏至ほど顕著に表れなかったのは、冬至の南中高度が低いためである。この条件下では、日射が床面に直接到達せず、主として南面の壁面に入射して反射した後に室内へ分散し、結果として突上窓開閉の差が小さくなったと推察される。

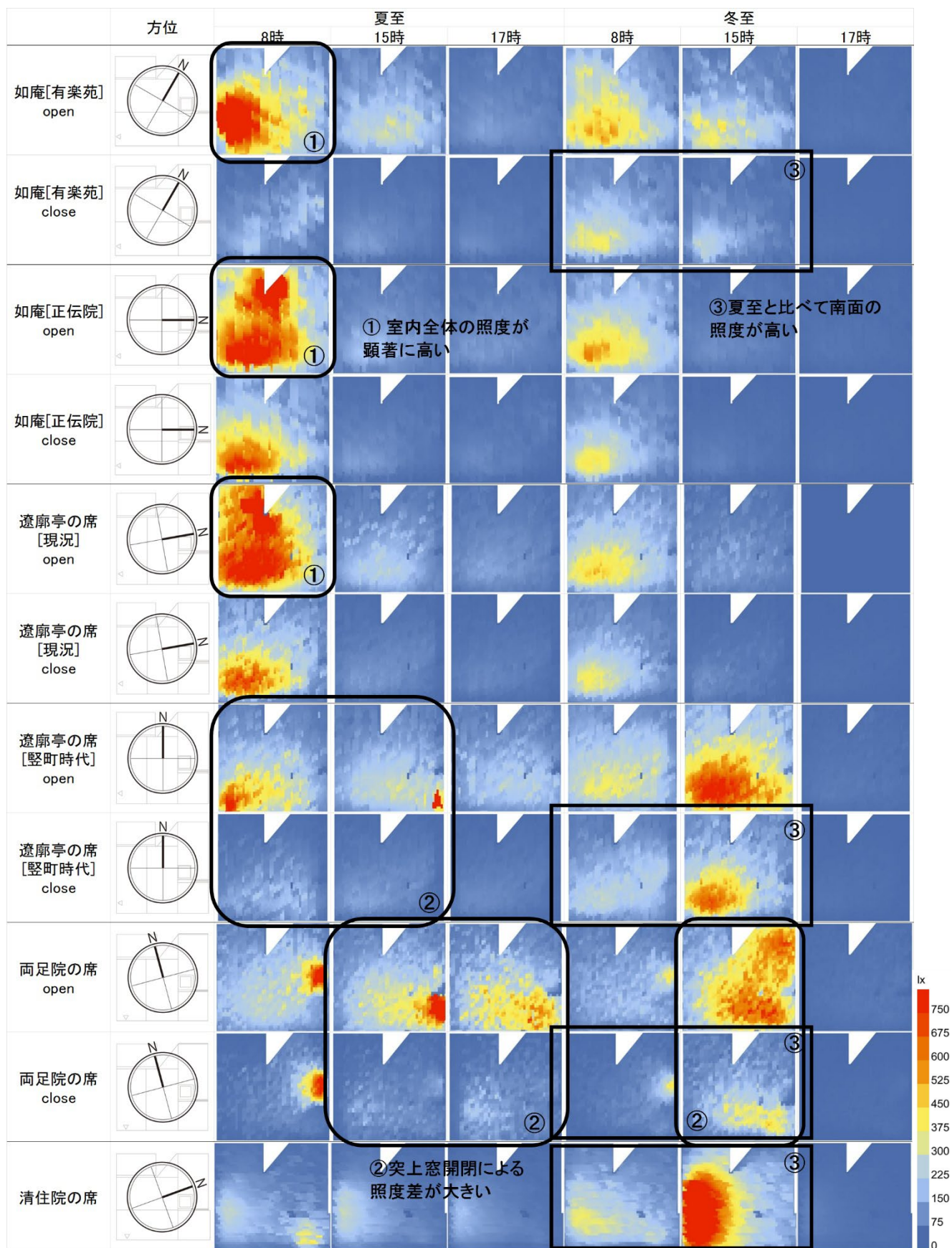
また、南中高度の差異によって水平面および垂直面に受ける日射量が異なる点も重要である。夏至においては水平面の単位面積あたりの日射量が大きい一方で、垂直面(南壁面)に入射する日射量は比較的少ない。これに対し、冬至では水平面の日射量が小さい反面、垂直面には多くの日射が到達する。この点を踏まえ突上窓を閉鎖した状態の照度分布を観察すると、冬至における如庵[有楽苑]、遼廓亭の席[豎町時代]、両足院の席、清住院の席の南面における照度は、夏至と比較して明確に高い値を示すことが確認された(表1書き込み③)。

6.2 茶室構成による差異(表2より)

次に方位を統一した条件での結果から、茶室構成による差異を考察する。如庵と遼廓亭の席における照度分布は、夏至・冬至のいずれにおいてもほぼ同一の傾向を示した。この類似性は、遼廓亭の席が如庵の写しとして高い再現性を有していることに起因すると考えられる。両席に共通する特徴として、有楽窓側からの採光は限定的である一方、躡口側の連子窓からの採光が大きな割合を占める点が挙げられる。これは、客座に座る客人を背後から照らしつつ、手前に位置する亭主および床の間を正面から照らすという、茶室に特有の採光構成を意図しているものと推察される。また、有楽窓が通風を主目的として設けられていた可能性も併せて考えられる。

一方、両足院の席および清住院の席が上記二席とは異なる照度分布を示した。まず両足院の席では、東面からの採光が少なくなっており、これは東面の連子窓の開口が上記二席と比べて小さいことおよび、半畳部分の下地窓が上記二席と比べて低い位置に設けられているためだと考えられる。ただ、清住院の席も両足院の席と同様に東面の連子窓が小さいのにも関わらず、夏

表1 各茶室の解析結果



至の清住院の席の8時および両足院の席の8時では東面の照度分布が明確に異なることは大変興味深い結果となった。また、清住院の席では貴人口が大きく開口されていることは、やはり照度分布に大きな影響を与えることが結果から分かる。

7. まとめ

本研究では、如庵の本歌およびその写し茶室を対象として、光環境の観点から比較分析を行い、その継承と差異を明らかにすることを目的とした。

その結果、遼廓亭の席は如庵の写しとして高い評価を受けてきた通り、開口部の構成が本歌とほぼ同一であり、照度分布においても如庵と類似した結果が得られた。すなわち、室内構成と光環境の双方において、本歌の特徴を高い精度で継承していることが確認された。一方、両足院の席および清住院の席では、方位の違いや開口部の大きさ、位置の差異により、如庵とは異なる照度分布が観察された。これらの席は平面構成において本歌を踏襲しつつも、立面構成や光環境においては大きな相異があり、その「写し」としての変容が興味深い点であった。

注

- (注1) 如庵の点前座と客座の位置関係について、文献6) (伊藤ていじ他 1992)、p.116-119 にて中村昌生は如庵を有楽好みの二畳遣違いの茶室と比較しており、ここに記述されている点前座と客座の位置関係を参考に本文の図1中に記した。
- (注2) 各茶室の展開図は以下の文献を元に筆者が作成したものである。如庵は文献3) (名古屋鉄道 1963)、図面第 1～21。遼廓亭の席は文献4) (堀口 1969)、p.712, 730-731。両足院の席は文献5) (岡田 1989)、p.86-87, 90。清住院の席は文献5) (岡田 1989)、p.87-90。
- (注3) 文献4) (堀口 1969)、p.113。
- (注4) 文献3) (名古屋鉄道株式会社 1963)、p.3-4。
- (注5) 文献4) (堀口 1969)、p.119 内の図「京都正伝院屋敷如庵間取り図 (文政 7 年、洗解庵図)」を参考に正伝院境内時期の如庵の方角を読み取った。
- (注6) 文献4) (堀口 1969)、p.715。
- (注7) 文献4) (堀口 1969)、p.712 内の図「何似宅の光琳好み茶室図 (好墨金、木津氏蔵)」を参考に仁和寺門前時期の遼廓亭の席の方角を読み取った。
- (注8) 文献5) (岡田 1989)、p.85-90。
- (注9) 文献5) (岡田 1989)、p.87-90。
- (注10) 文献7) (南浦1968) では、裏千家流において朝茶事の濃茶が 8 時、正午の茶事の濃茶が 15 時に行われると記されている。本研究では、この記述を参考に解析時刻を 8 時および 15 時、さらに日没前の時刻として 17 時の三時刻で設定をした。

参考文献

- 1) 後藤千夏:「待庵の写し茶室の光環境に関する研究」, 日本建築学会東海支部研究報告集 (49), 305-308, 2011-02-19
- 2) 後藤千夏 他:「近現代の待庵の写し茶室における継承と創意に関する

研究」, 日本建築学会計画系論文集 75 (654), 1855-1863, 2010

- 3) 名古屋鉄道株式会社: 国宝如庵・重要文化財旧正伝院書院移築修理工事報告書, 名古屋鉄道, 1963
- 4) 堀口捨己: 茶室研究, 鹿島研究所出版会, 1969
- 5) 岡田孝男: 京の茶室 東山編, 学芸出版社, 1989
- 6) 伊藤ていじほか: 日本名建築写真選集 第10巻, 新潮社, 1992
- 7) 南浦平安: 裏千家流茶の湯手びき, 文進堂, 1968
- 8) Tedeschi Arturo, Wirz Fulvio: AAD_algorithms-aided design : parametric strategies using Grasshopper, Le Penseur Publisher, 2014